

# 日中母語場面における発話の重なり後の 発話権交替と話題転換に関する考察

## A Study on Turn-Taking and Topic Shift After Overlap in Native Japanese and Chinese Conversations

周 浩  
ZHOU Hao

### 要旨

自由会話における発話の重なりは前話者の発話権を侵害するトラブルと捉えられてきた。また発話の重なりによる話題の展開は会話の進行を阻害すると認識されてきた。しかし、実際の日中母語場面における自由会話において発話の重なり後の発話権交替と話題の展開にどのような特徴があるか、さらにその特徴が母語によって異なるかの詳細な分析は行われていない。そこで、本研究では日中母語場面の「自分のアルバイトについて」をテーマとした自由会話において発話の重なり後、後話者による発話権奪取が行われるか、あるいは前話者による発話権継続が行われるか、さらに発話権の奪取、継続によって、自由会話の話題が別の話題に移行されるか、あるいは維持されるかを分析した。分析の結果、日本語母語場面では見られなかったが、中国語母語場面では発話の重なり後、発話権が継続し、話題移行するという連鎖の特徴が観察された。また、発話の重なりの種類はそれぞれの連鎖において、中国語母語場面は日本語母語場面よりバリエーションが多いことが分かった。

キーワード：母語場面、自由会話、発話の重なり、発話権交替、話題転換

### 1. はじめに

日常会話は単純な発話順番の移行を成しているわけではなく、先行発話の一部または全体が他の発話者の発話と重なった状態で、会話が流れていく場合がある。木暮（2002）は会話参加者の発話が他の参加者の発話と同時に現れることを発話の重なりとしている。従来、発話の重なりは先行発話を中断させ、会話を阻害する要素だと認識されてきた。しかし、生駒（1996）は親しい女性同士の雑談<sup>1)</sup>を分析し、発話の重なりの機能として、会話を停滞させる、会話を促進する、また先行発話にプラスにもマイナスにも作用しない中立的な機能があると述べている。また、実際の日常会話を観察すると、発話の重なりが相手の発言を補足したり、

説明を追加したりすることで、会話を円滑に進める手助けをする場面も多く見られる。このように、発話の重なりが常に会話を阻害するわけではなく、時と場合によっては、会話をスムーズに進めるための重要な要素となっていると言える。

しかし、このような発話の重なりが生じた後、会話参加者がどのように発話権を交替しているのか、発話の重なりが会話の話題にどのような影響を与えるのかについての研究は少ない。また、会話参加者の母語による影響を受けているのかについての詳細な分析も、管見の限りではあまり行われていない。そこで、本研究では、自由会話における発話の重なりに焦点を当て、重なりが生じた後に話者がどのように対応するかを調査し、発話権の交替や自由会話における話題転換について考察したい。

2章で発話権および話題転換に関する先行研究を紹介する。3章では本研究の研究課題を提示し、4章でその研究課題を検討するための研究方法を述べる。5章は4章で述べた方法で得た会話データの具体的な会話例を提示しながら、分析結果を詳述する。6章は本研究のまとめ、および分析結果に基づいた考察、最後に7章で今後の課題について述べる。

## 2. 先行研究

### 2.1 発話権に関する先行研究

Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) は turn (ターン) を「話す義務と権利の部分として割り当てられ、会話の構成のもっとも基本的な単位である」と定義している。つまり、ターンは会話参加者が話し始めてから終わるまでの一連の発話であり、会話の最も基本的な単位とされている。本研究では「発話権」を、会話参加者が実質的な意味を持つ発話を行う権利として捉える。また、Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) は話者交替 (turn-taking) のルールを以下のように示している<sup>[2]</sup>。

(1) すべての turn において、最初の turn 構成単位の最初の「TRP」(turn が移行する可能性がある場所: transition relevance place) において、A 現在 turn を持っている話し手が次の話し手を選ぶ場合には、選ばれた次の話し手だけが turn を取る権利と義務を持つ; B 現在 turn を持っている話し手が次の話し手を選ばない場合には、その話し手以外の会話参加者全員が自分から次の話の turn を取る権利をもち、そのうち、最初に話し始めた人が turn を持つ権利がある; C 現在 turn を持っている話し手が次の話し手を選ばず、かつ次の turn を取る人がいない場合、現在 turn を持っている話し手が turn を持続することができる。

(2) 最初の turn 構成単位の最初の TRP で、(1A) も (1B) も適用されず、(1C) の条件のもとで現在の話者が話し続けた場合、次の TRP において (1A) - (1C) が再び適用され、話者の交替が起こるまで反復される。

しかし、上述したように、実際の会話を見ると、全ての turn が TRP で移行しているわけではなく、先行発話に割り込んで、先行発話と重なる場合もある。Sacks, Schegloff & Jefferson (1974) はこのような重なりは TRP を誤認した話者交替、ないしは話者の発話権

交替のルールの違反であると考えている。では、このようなルールの違反は自由会話の阻害要因となるのであろうか。

劉（2011）では、日中接触場面の会話における割り込み発話について分析を行っている。割り込みとは先行話者が話している途中で、次話者が発話を挿入することである。本研究では、発話の重なりは劉（2011）の割り込み発話の一種類として捉える。劉（2011）は日本語母語話者の場合、割り込み発話により、相手の発話権を奪取するのではなく、話者間で共有する傾向があるのに対し、中国語母語話者は発話権を奪取し合う場合が多いと指摘している。しかし、劉は日本語母語話者は発話権奪取しない、すなわち発話権を継続する、中国語母語話者は発話権を奪取するという結果に至ったが、発話の重なり後、話者が発話権を継続し、特に日本語母語話者はどのように継続しているのかの分析を行っていない。また、中国語母語話者に発話権奪取された後、日本語母語話者はどのように発話権を取り戻すのかも分析していない。

陳（2019）は、相手言語接触場面と第三者言語接触場面における中国語母語話者による発話の重なり後の談話展開について考察している。相手言語接触場面とは日本語母語話者と中国語母語話者による日本語で会話する場面である。第三者言語接触場面は中国語母語話者と韓国語母語話者による日本語で会話する場面である。その結果、相手言語接触場面では会話参加者双方が発話を中断せず、言いたいことを続行しながら会話を円滑に進めるが、第三者言語接触場面では、互いにターンを譲らず各自の意見を明瞭に述べて競合的に各自の話題を継続するという傾向があると述べている。しかし、中国語母語話者と日本語母語話者による相手言語接触場面では、中国語母語話者の特徴を指摘したが、日本語母語話者の特徴を詳しく分析していない。また、日中母語話者間にどのような違いがあるかも指摘されていない。

劉（2011）では、日中接触場面において、中国語母語話者は相手の発話権を奪取するという結果があったが、陳（2019）では、日中接触場面において、中国語母語話者と日本語母語話者が自分の発話を中断しない、つまり自分の発話を継続するという結果になっている。発話の重なりによって、発話権が奪取された後、話者はどのような反応があるのかが不明である。また母語場面では、話者は相手の発話の重なりにより、発話権が奪取された後、自分の発話権を放棄するか、取り戻すか、またどのように再び会話に参加するかの分析も必要である。

## 2.2 話題転換に関する先行研究

村上・熊取谷（1995）では日本語母語場面における会話を分析し、話題転換タイプを派生型、新出型、再生型の3つに分けた。また、話題転換ストラテジーとして先行話題を終了させる行動、後続話題を開始する行動があると指摘している。しかし、先行話題の終了プロセスにどのような違いが見られたのか、また発話の重なり後にどのような話題転換があるのかの2つの問題を分析していない。

花村（2015）は日本語母語場面の会話における話題転換する際の言語的、非言語的表現を

分析している。話題転換タイプを新出型、再開型、前提提示型に分けた。分析の結果、新出型では終了の沈黙が多い、接続表現はあまり使われない、再開型では接続表現が多い、言いよどみはあまり使われない、前提提示型では言いよどみと開始の沈黙が多いと指摘している。しかし、花村（2015）では、新出型と再開型は発話の重なりで話題転換する場合があると示されているが、発話の重なりと話題転換の関係は分析されていない。

許（2016）は日中接触場面における会話を分析している。中国人日本語学習者は話題転換する際、突然先行話題と異なる方向である話題を転換する傾向があり、その内容が自分の経験や知っている範囲から連想してくる話題であるという特徴があると述べている。しかし、日本語母語話者がどのような特徴があるか、また日中母語話者間にどのような違いがあるかが分析されていない。

### 3. 研究課題

「はじめに」で述べたように、これまで発話の重なりは会話を円滑に進めるという促進的な役割があると指摘されている。一方、発話の重なりは話者の発話権を侵害するという阻害的な作用もあると言われている。しかし、これまでは主に発話の重なりと重なり後の発話権交替、または発話の重なりと重なり後の話題転換に焦点を当て、発話権交替と話題転換の関係について焦点を当ててこなかった。発話の重なりは話者の発話権また話題の展開に与える影響を明らかにするために、発話の重なり後の発話権交替、話題転換の関係に焦点を当てなければならない。

そこで、本研究は以下の3つの課題を検討するため、日中母語場面での自由会話における発話の重なり後の発話権交替および話題転換を分析する。

- ①発話権奪取が行われるか、または発話権継続が行われるか。
- ②発話権の奪取・継続によって、自由会話の話題が別の話題に移行するかあるいは維持されるか。
- ③上記の①、②に基づき、発話の重なりを分類する。

### 4. 研究方法

#### 4.1 調査協力者

本研究では日本語母語話者女性3名と中国語母語話者女性3名に調査協力をしてもらった。その内、日本語母語話者はすべて日本の大学に在籍する大学生である。中国語母語話者はすべて来日四年以上、日本の大学院に在籍する大学院生である。

#### 4.2 データの収集方法

本節では、まず、本研究で使用した自由会話のテーマの選択の理由を説明する。自由会話のテーマは「私のアルバイトについての話」にした。テーマ「私のアルバイトについての話」にした理由が2つある。1つ目の理由は今回の調査協力者全員アルバイトをしていることを

事前に把握していたからである。そして、2つ目の理由は他人のアルバイトについて詳しく分からないこともあり、その分からないことに対する話者のやりとりで、重なりが生じやすいと予測していたからである。

本研究で使用しているデータはすべて2018年の夏に録音、撮影したものである。調査する際、調査協力者にデータを研究で使用する承認を得た上で、「同意書」に署名してもらい、その上で、年齢、メールアドレスを記入してもらった。データを収集するとき、部屋の中にビデオカメラとICレコーダを設置した。撮影した際、3人がお互いの表情と体を見えるように、テーブルを半円形に作り、参加者に協力してもらった。収集の際には、協力者以外に撮影する人が1人いた。自由会話が始まる前に「アルバイトについて話してください。」という指示をした。

### 4.3 音声データの処理方法

#### 4.3.1 データの時間

本研究では、15分の音声データを分析しているが、実際のデータは15分以上収集されている。4.2で述べたように、データを収集する際、協力者以外に撮影する人が1人いるため、自由会話の最初では調査協力者が緊張している可能性があると考え、最初の話者間の挨拶や直接自由会話のテーマに関わらない部分などを取り除いた。自由会話のテーマに入ったら、その後15分間前後の発話の切れ目で区切り、その15分間をデータとして分析した。

### 4.4 分析方法

#### 4.4.1 重なりの認定

本田（2015）は、「重なりとは、複数の話者が参加する談話において、ある一時点で複数の話者が同時に音声を発する現象をさしている」（p.48）と述べている。木暮（2002）は会話参加者の発話が他の参加者の発話と同時に現れることを発話の重なりとしている。本研究もこの2つの概念を援用し、参加者2人あるいは3人が同時に発した発話を重なりとする。自由会話における重なりの認定に関しては、10年以上日本語教育歴のある日本語母語話者1名と筆者が会話データを読み込みながら認定した。今回は重なりにより、話者の発話権交替および話題転換の実態を考察したいため、笑い声、相槌、独り言での重なりは分析対象から除外した。

#### 4.4.2 発話権奪取・発話権継続

劉（2011）では、後話者の割り込み発話によって前話者の発話が中断され、発話権が前話者から後話者に移行する場合は発話権を奪取すると述べている。本研究では「発話権を奪取する」という用語を援用し、「発話権奪取」と呼ぶ。「発話権奪取」とは現在の話し手のターンが終わっていないうちに、他の参加者が自分の発話を優先させようとし、重なって話し、現在の話し手から発話権を奪うことを指す。

発話権奪取：

話し手 A：———

話し手 B：——— |

また発話権を奪取するのではなく、先行話者が発話権を継続する場合は「発話権継続」と呼ぶ。「発話権継続」とは現在の話し手のターンが終わっていないうちに、他の参加者が自分の発話を優先させようとし、重なって話しても、前話者が自分の発話権を放棄するのではなく、自分の発話を最後まで話し続けることである。

発話権継続：

話し手 A：——— |

話し手 B：———

#### 4.4.3 話題維持・話題移行

本研究は2.2で述べた村上・熊取谷（1995）および花村（2015）の話題転換タイプに基づき、派生型・前提提示型を「話題維持」とし、新出型、再生型、再開型を「話題移行」に区分した。詳細は、5章の調査結果で示す。

### 5. 調査結果

#### 5.1 日中母語場面における発話の重なり後の連鎖

4章で述べた分析手順にしたがって、発話の重なり後、後話者が前話者の発話権を奪取したか、あるいは発話の重なりが生じて、前話者が自分の発話権を継続したかを判断し、「発話権奪取」と「発話権継続」に分類した。その後、重なりによって、自由会話の話題が移行されているか、または維持されているかを判断し、「話題移行」と「話題維持」に分類した。

その結果、日本語母語場面では、「重なり後、発話権継続による話題維持」、「重なり後、発話権奪取による話題維持」、「重なり後、発話権奪取による話題移行」のような繰り返し現れる3つの連鎖が見られた。しかし、今回は重なり後、発話権継続による話題移行の場合が日本語母語場面において観察されなかった。一方、中国語母語場面では、「重なり後、発話権継続による話題維持」、「重なり後、発話権継続による話題移行」、「重なり後、発話権奪取による話題維持」、「重なり後、発話権奪取による話題移行」との4つの連鎖が見られた。

また、本研究では、発話の重なりがどのように話者間の発話権の交替に影響を与えているのか、また発話の重なりが先行発話の話題と関連しているかどうかを観察したいため、発話の重なりを分類する際に、隣接している先行発話の内容と関連のある発話の重なりと、関連のない発話の重なりで大別した。今回は日本語母語場面でも、中国語母語場面でも15種類の重なりが観察された。そのうち、重なりが隣接している先行発話と関係のあるものは以下の10種類である。「隣接している先行発話の話題の継続」、「隣接している先行発話の繰り返し」、「隣接している先行発話への応答」、「隣接している先行発話への質問」、「隣接している先行発話へのコメント」、「隣接している先行発話の内容の先取り」、「隣接している先行発話の終

結の予測」、「隣接している先行発話への助け舟」、「隣接している先行発話の質問の予測による応答」、「隣接している先行発話の話題とは無関係の新たな話題提示」である。重なりが隣接していない先行発話と関係のあるものが「隣接していない自身の先行発話を継続」、「隣接していない先行発話へのコメント」、「隣接していない先行発話への応答」の3種類が出現している。また、話者2人あるいは3人の「同時発話による重なり」と以上の分類に判断できない一文字や単語レベルでの重なりは「その他」にした。

## 5.2 日本語母語場面の特徴

次はそれぞれの母語場面でしか見られなかった発話の重なりを具体的な会話例を提示しながら説明する。

まずは日本語母語場面でしか観察できなかった発話の重なりを説明する。今回の会話データでは重なり後、発話権継続による話題移行の場合が見られなかった。また、発話権奪取による話題維持の場合では、「隣接している先行発話の繰り返し」、「隣接している先行発話への助け舟」との2種類の重なりが日本語母語場面にしか観察なかった。以下の例1に生じた発話の重なりは「隣接している先行発話の繰り返し」による重なりである。

例1 話題：【アルバイトの業種】<sup>(3)</sup>

- 1 J1：アルバイト、ねえ、なんだっけ？
- 2 J2：私、飲食。
- 3 J1：飲食、塾。
- 4 J3：っと、ケーキ屋さん 〈とあと〉<sup>(4)</sup>
- 5 J1：〈ケーキ〉 屋さんか。

例1は話者3人の【アルバイトの業種】という話題の断片である。発話番号4と発話番号5において発話の重なりが生じている。J1は先行発話の「ケーキ屋さん」を繰り返すことによって発話権を奪取したが、自由会話の話題は維持されている。しかし、この重なりによって、前話者であるJ3は自分の発話「ケーキさんとあと」を中断し、自分の言いたい内容を最後まで言い続けることを放棄した。つまり、前話者であるJ1が自分の発話権を放棄したと考えられる。

重なり後、発話権継続による話題維持の場合は「隣接している先行発話の質問の予測による応答」の重なりは日本語母語場面のみ観察された。以下の例2は「隣接している先行発話の質問の予測による応答」の重なりである。

例2 話題：【J1の塾のアルバイトについて】

54J2：塾講、え、めっちゃ教えてるよね、科目

55J1：あ、そう、五教科、小学 〈校から小学生から〉 高三まで。



56J 3 : <え～すごいですね>。

→57J 2 : 高三はもう、数学 <もやってるでしょ> ?

→58J 1 : <数学もやってる>。

59J 2 : <無理だわ～>

60J 3 : <すごいなあ～>

例2は【J1の塾のアルバイトについて】の話題について話している際、発話番号58、J1が先行発話の「数学」を聞き、「数学もやっているでしょ」と質問されることを予測して、その質問に対しての応答で重なりが生じた。しかしこの重なりで、先行発話が中断されたのではなく、自分の発話を最後まで継続したため、発話権を奪取ではなく、発話権を継続し、自由会話の話題も維持されている。

### 5.3 中国語母語場面の特徴

本節では中国語母語場面にしか見られなかった重なりの分類について説明する。

日本語母語場面では、重なり後、発話権継続による話題移行の場合が見られなかったが、中国語母語場面では観察された。この場合で生じた重なりは「同時開始による重なり」、「隣接している先行発話の話題とは無関係の新たな話題提示」、「隣接していない自身の先行発話を継続」、「隣接している先行発話への質問」の4種類あった。例3は「隣接している先行発話の話題とは無関係の新たな話題提示」による重なりである。

例3 話題：【C1のアルバイトのエピソード】→【日本でのアルバイト】

241C 2 : <那种就是不会长久的>。

242C 1 : <就在一起几天、我们就>很那个。

243C 3 : 醉了。

《沈黙2秒》

→244C 2 : 确实 <挺那个的>。

→245C 1 : <聊着聊着没>话题了。好吧、你来暑假、来日本之后、我们说说来日本之后的打工吧。

(日本語訳)<sup>(5)</sup>

241C 2 : <そういうのは長く続かないよ>。

242C 1 : <何日しか付き合っていない、私たち>も引いたよ。

243C 3 : まいったなあ。

《沈黙2秒》

→244C 2 : 確かに <引くわ>。

→245C 1 : <話していくうちに>話題がなくなったね。じゃあ、あなたは夏休み、日本に来た後、日本に来た後のアルバイトを話そう。



例3のように、発話番号245、C1が前話者C2の発話に重なったが、C2は重ねられても、自分の発話権を放棄するのではなく、最後まで言い続けた。したがって、この重なりで前話者の発話権を奪取していないが、自由会話の話題が「C1のアルバイトのエピソード」から「日本でのアルバイト」に移行された。

重なり後、発話権奪取による話題維持の場合は「隣接していない自身の先行発話を継続」「隣接している先行発話の話題の継続」「隣接していない先行発話への応答」「隣接している先行発話の質問の予測による応答」の4種類が中国語母語場面で観察された。以下の例4は「隣接していない自身の先行発話を継続」することによって生じた重なりである。

例4 話題：【大学時代のアルバイト】

109C3：打啥啊？

110C2：就那种超市促销、哈哈。

111C3：啊啊、有这样的好像。

112C1：我们〈学校〉。

→113C2：〈但是超市〉促销我好〈像没〉。

→114C1：〈有有有〉他们也有去过。

(日本語訳)

109C3：なんのアルバイト？

110C2：スーパーの販売員的な、はは。

111C3：ああ、そういうのあったね。

112C1：うちの〈学校〉。

→113C2：〈でもスーパー〉の販売員、私（やったこと）が〈ないみたい〉。

→114C1：〈あるあるある〉、彼らは行ったことがある。

発話番号113、C2が前話者C1の発話に重なって、一旦C1の発話を中断した。しかし、その後、発話番号114発話、C1が発話番号112の自分の発話を継続しようとし、先行発話である発話番号113の発話を中断させ、発話権を自分に取り戻した。自由会話の話題も【大学時代のアルバイト】で維持されている。

最後に、重なり後、発話権継続による話題維持はこのような7種類が中国語母語場面のみ見られた。「隣接している先行発話の話題の継続」、「隣接している先行発話への助け舟」、「隣接していない先行発話への応答」、「隣接していない先行発話へのコメント」、「隣接している先行発話の繰り返し」、「隣接している先行発話の内容の先取り」、「隣接していない自身の先行発話を継続」の7種類である。例5は「隣接していない先行発話への応答」による重なりの例である。

例5 話題：【大学時代のアルバイト】

105C 1：嗯。那你们、你们高中、大学就没有打过别的工？

106C 3：没有。

107C 2：大学里、嗯、我是做家教、也打过别的工。

108C 1：我也没有打过。

(日本語訳)

105C 1：うん。あなた達、あなた達高校、大学で他のアルバイトしたことがないの？

106C 3：ない。

107C 2：大学で、うん、私は家庭教師やったことある、他のアルバイトもした。

108C 1：私もやったことがない。

例5では発話番号105、C 1が質問し、他の話者C 3、C 2が応答しているときに、発話番号108、話者C 1が自分の105発話の質問に答えることによって、先行発話に重ね、重なりが生じた。しかし、この重なりが生じていても、発話番号107、C 2が自分の発話権を放棄したのではなく、最後まで自分の発話を続けた。自由会話の話題も【大学時代のアルバイト】のままで、維持されている。

## 6. まとめと考察

本研究は重なり後、発話権の交替と話題転換について分析した。重なり後、発話権維持による話題移行の重なりは中国語母語場面にしか見られなかった。また、自由会話の話題転換、発話権奪取また発話権継続による発話の重なりは重なり後の連鎖の種類に基づいて、重なりの種類を分類した。各連鎖で現れた重なりの種類は表1で示す。表1の結果から、重なり後、発話権奪取による話題移行の連鎖以外、他の3つの連鎖では中国語母語場面で観察された重なりの種類は日本語母語場面より多かったため、中国語母語場面では発話の重なりのバリエーションが多いと言える。

表1 日中母語場面における発話の重なりの種類

重なり後の連鎖	日本語母語場面における重なりの種類	中国語母語場面における重なりの種類
発話権継続による話題維持	6種類	8種類
発話権継続による話題移行	0（観察されない）	4種類
発話権奪取による話題維持	5種類	7種類
発話権奪取による話題移行	8種類	8種類

重なりの内容について、日本語母語場面では、発話の重なりの内容が隣接している先行発話と関連のある内容が多いことが分かった。これは、日本語母語話者が自由会話の流れを維持し、現在の話題に関連する情報を提供する傾向が強いことを示唆する。したがって、日本語母語話者は発話の重なりが生じる際、既存の話題から大きく逸脱せず、現在進行中の話題を保持するために、新たな話題への移行は少ないと言える。つまり、話題の移行を意図する場合は、前話者の発話を最後まで聞き、発話権を取得してから話題を変更する傾向があると考えられる。一方、中国語母語場面では、発話の重なりの内容が隣接している先行発話に関連する場合もありますが、隣接していない先行発話や新たな話題に移行することも多く見られた。これは、中国語母語話者が現在の話題にとどまらず、過去に出現した話題に戻ったり、全く異なる話題に移行したりすることで自由会話の話題を変える柔軟性を持っていることを示していると言える。発話の重なりが話題の展開や変化を促進し、自由会話に新たな要素を追加するための手段として用いられていると推測できる。

以上の結果に踏まえ、日本語母語話者は発話権を奪取せず、自由会話の話題を話者間で共有しなら、会話を構築するという傾向がある。これは劉（2011）の先行研究と同じ結果になっている。今回の調査では日本語母語場面では重なり後、発話権継続による話題移行の場合が見られなかった。したがって、日本語母語場面においては、会話参加者が現在の発話を完了してから次の話題に移行するという特徴が見られ、発話権交替や話題転換に対する規制が比較的強いことが考えられる。発話の重なりの内容も隣接している先行発話と関連することが多く、話題の変更に対するルールが明確であると言える。

中国語母語場面では、自由会話の流れを柔軟に変更することができ、現在の話題が終わってなくても、以前の話題に戻ったり、新たな話題に移行したりすることができると考えられる。また、中国語母語話者は自分の発話権を継続しながら、話題を移行する特徴があると言える。これは、発話の重なりが発生しても、会話参加者が自分の発話権を保持しつつ、自由会話の話題を変える能力を持っていることが言える。しかし、この現象は日本語母語場面では見られなかったため、日本語母語場面においてルール違反を及ぼす可能性がある。中国語母語場面の自由会話はより流動的であり、話題の移行や発話の重なりへの受け入れが比較的自由であるのに対し、日本語母語場面の自由会話は話題の整合性や発話権の管理が厳格であり、自由会話の流れを保つために規制が多いと考えられる。

## 7. 今後の課題

今回は発話の重なり後の発話権交替会話の話題転換について考察し、発話の重なりを細かく分類した。今後はこれらの分類の共通性を見ていきながら、日本語母語場面と中国語母語場面の特徴を明らかにしていきたい。また、今回は1つのテーマの自由会話しか観察しなかったため、他のテーマの自由会話を継続的に調べる必要がある。さらに、参加者の人数は発話の重なり後の発話権及び話題転換にどのような影響があるかを考察したい。

## 註

- (1) 本研究では、「雑談」を「自由会話」として捉える。
- (2) 英語の訳文は劉（2011）を参照したものである。
- (3) 自由会話の話題を【 】で示す。
- (4) 発話の重なる発話内容は〈 〉で示す。
- (5) 日本語訳文は、筆者と日本語能力試験で N1 に合格した中国語母語話者 1 名が共同で作成したものである。

## 参考文献

- 生駒幸子（1996）「日常会話における発話の重なる機能」『世界の日本語教育』 6、国際交流基金日本語国際センター、pp.185-200
- 許家瑤（2016）「中国人日本語学習者と日本語母語話者の接触場面における話題転換その（1）友人関係の下で中国人日本語学習者による話題転換に着目して」『平安女学院大学研究年報』 16、pp.64-73
- 木暮律子（2002）「話者交替における発話の重なり：母語場面と接触場面の会話について」『日本語科学』 11、pp.115-134
- 陳新（2019）「会話における発話の重なり後の談話展開について—中国人上級学習者の相手言語接触場面と第三者言語接触場面の比較—」文教大学『言語と文化』 31号、pp.89-113
- 花村博司（2015）「日本語の会話における話題転換表現：新出型・再開型・前提提示型という話題転換の型による使いわけ」『社会言語科学』 19、pp.75-92
- 本田明子（2015）「日本語日常談話における重なるの様相—学習者はなぜ重ならないのか—」『ことば』 36号、pp.48-59
- 村上恵・熊取谷哲夫（1995）「談話トピックの結束性と展開構造」『表現研究』 pp.101-111
- 劉佳琄（2011）「会話における発話の重なりについて」名古屋大学大学院国際言語文化研究科『言葉と文化』 12、pp.49-66
- 劉佳琄（2011）「会話における割り込み発話についての考察—日本語母語話者場面と中国語母語話者場面の対照研究—」『小出記念日本教育研究会論集』 19、pp.39-55
- Sacks, H., Schegloff, E.A. & Jefferson, G. (1974) *A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation*, Language 50, 696-735.